

2人のミャンマー小児に発見された稀な超不安定ヘモグロビン変異体, Hb Monroe [β 30 (B12) Arg \rightarrow Thr]

原野 昭雄, 原野 恵子*, Ne Win (ネ ウィン)**

(川崎医科大学学生化学, *川崎医療福祉大学医療技術学部臨床栄養科,

**Pathology Research Division, Department of Medical Research (Lower Myanmar))

(pp. 91~97)

PCR-シーケンシング法でミャンマー共和国の輸血依存性貧血患者の血液について遺伝子診断を行ったとき, 非常に稀な異常ヘモグロビン, Hb Monroe [β 30 (B12) Arg \rightarrow Thr], を持つ2人のミャンマー小児 (My-194と My-201) に遭った. Hb Monroe は mRNA のプロセッシングの過程においてミスプライミングの結果, β^0 -サラセミア症を起す異常ヘモグロビンである. My-194は Hb Monroe と β^0 -サラセミア症に似た症状の β IVS I-5G \rightarrow C 変異体の β^+ -サラセミア症とのヘテロ接合体であり, My-201は Hb Monroe のホモ接合体であった. しかし, My-194の IEF や DEAE-HPLC による溶血液の Hb 分析は正常なパターンを示し, 輸血の影響が考えられた. My-201の Hb 分析は Hb A は見られず Hb F が主成分となっており, このケースでは, Hb A に代わり Hb F が主要成分として産生していると考えられた.

大腸癌の肝転移切除術後の成績, 予後因子とフォローアップについて

山下 和城, 三上 佳子, 池田 正治, 山村 真弘,
久保添忠彦, 吉田 和弘, 浦上 淳, 木元 正利,
角田 司, *江藤 敏文

(外科消化器部門, *江藤病院外科)

(pp. 99~112)

大腸癌の肝転移に対しての手術治療成績は向上したとはいえ再々発例も少なくない. 目的: 大腸癌の肝転移に対する肝切除術後の成績を検討し, 予後因子, フォローアップ方法を考察する. 対象: 過去26年間, 当科で治療を行った1484例の大腸癌症例のうち223例が同時性または異時性肝転移を認めた. そのうち肝切除術を行った44例を対象とした. 方法: 7つの臨床病理学的項目について Kaplan-Meier 生存曲線から予後因子を検討した. 結果: 肝転移巣に対して治癒的切除を行った44例の1年, 3年, 5年生存率はそれぞれ85.9%, 44.9%, 23.0%であった. 同・異時性, 切除方法 (葉切除と区域・部分切除), 病理組織学的分化度は予後には影響しなかったが, 肝転移巣数, 転移巣径, 原発巣のリンパ節転移の有無は予後に影響していた. 異時性群の肝転移巣径は平均4.5 cm で同時性群の2.5 cm より有意に大きかった ($P < 0.05$). リンパ節転移有り群は原発巣手術から肝転移再発発見までの中央値は15.7ヶ月で, リンパ節転移無し群は37.7ヶ月であった ($P < 0.05$). 21例の異時性肝転移群のうち, 19例は3年以内に肝切除術が行われていた. 考察: 今回の検討から肝切除術は安全に行われていた. 腫瘍径が小さいうちに肝転移を発見することは生命予後を改善すると考えられた. 異時性群の肝転移巣径が大きかったのはフォローアップ時の早期発見が遅れた可能性が考えられ, 大腸癌術後の画像による定期的なフォローアップの必要性を強く感じた. 肝転移に対するフォローアップ計画として, 原発巣術後12ヶ月から36ヶ月の2年間は画像検査を中心に厳重に行うべきである.